竹下復興大臣記者会見録

（平成27年2月18日（水）17：20～17：26　於）銀座三越）

（問）まず、大臣から。今日もだいぶ買っておられましたけれども。

（大臣）気仙沼市と私の地元の島根県浜田市が同じ漁港つながりで非常に仲いいんですよ。今、気仙沼に浜田市から３人、市の職員を派遣して依然として応援しているんですね。そういった関係もあって、気仙沼という名前は我々にとっては、地元にとっても大事な名前ですし、ここにちゃんと復活してもらおうと。ただ元どおりではなくて、もっと元気になってもらうという思いを込めて、今日もお邪魔をさせていただきました。

（問）この銀座のど真ん中で、気仙沼の特産物が売られるという意義については、どのようにお考えですか。

（大臣）さっき阿川さんに聞いたら「やっぱ銀座だべ」というのは、阿川さんが考えたキャッチコピーだというから、あれがいいと。

（阿川氏）お褒めいただきました。

（大臣）いなか者にとっては、あれがいいということでお話をさせていただきましたが、やはり銀座のど真ん中で、吉幾三さんの歌じゃないけど、銀座でべこ飼うだ、という勢いというか、日本で一番地価の高いところでやるぞと。一番商売の難しいところで売るんだというのは意気込みがあっていいですね。

（問）来月で震災から丸４年ですけれども、そのタイミングで銀座のど真ん中でやって、首都圏の方々に何を感じてもらえたらなとお考えですか。

（大臣）２つあると思いますね。一つは、やはり時間が経つにつれて記憶が風化してきますので、こういうイベントを節目節目でやることによって「そうだ、被災地はまだ苦しんでいるんだ」ということをわかってもらう。これが非常に大事なことだと思います。それからもう一つは、ここよりもむしろ福島なのですが、風評被害にものすごく悩んでいるのです。気仙沼も農産物はいいのですが、海のものについては近いものですから、ややもすると敬遠されがちなところもあります。この風評被害を乗り越えるという意味でも頑張っていってもらいたいと思いますね。

（問）販路の開拓という課題もありますから、やはりいろいろな人に知ってもらいたいというのが大事でしょうか。

（大臣）知ってもらいたいし、今、見ましたら、いろいろな知恵も出てきていますね。新しいものを色々とつくったり。今までは水産物をやっていたけれども、今度はバッグなんかをあそこでやっている店もありましたし、いろいろな新しい商品を地元のもので開発しているということ。これ、いいですよ。そうやって新しいものが出てくるというのは、いいことだと思いますね。

（問）阿川さんにお願いします。いつも復興支援をありがとうございます。

（阿川氏）いえいえ、そんな。微々たることをやっているんです。

（問）あらためてなのですけれども、銀座のど真ん中で気仙沼のものを売るということの意義といいますか、どのように感じていますか。

（阿川氏）今日は本当に三越さんのご協力で、これだけの物産展ができたというのはすごくうれしいことだし、本当に大臣がおっしゃったとおりに、ときどき節目節目で「そ

うだ、そうだ」というふうに思い出すということも大事なのですけれども、「やっぱ銀座だべ」ということを始めたときに、直後とか、いろいろなところで何かをやりたい、助けたい、協力したいということが、もっと日常的なビジネスとして長く続くということを、人間の交流と物の交流と恒常的な形にしたい、というのが当初の目的なんです。まだそういうことが途上ではあるのですけれども、それをやっていると、私も「気仙沼って、こんなにおいしいワカメがあるなんて知らなかった」と言うと、あちらは「え？ 普通のことなんですけど」ということが、案外この流通時代に分かっていないことと、それによって知り合った人間の関係ができただけで、「臼井壯太朗さん（やっぱ銀座だべ気仙沼実行委員）のために、私、行くわ」とか「臼井さんがそれを望んでいるんだったら、私、協力するわ」という個人のつながりということが、結局、輪になって、今、銀座の輪になっていって、集まると「次に何しよう」と思いながら銀座の人たち飲んでばかりいるんですけれども。それが結局、続くことが大事だと思っているので。話が長くなってすみません。

銀座って、年中行事がすごくたくさんあるんですよ。ゆかたまつりとかお茶会とか七夕とかいろいろと。そのときに、お茶会のときに「気仙沼のお菓子を入れられないかな」というと、「お茶のお菓子だから小さいほうがいいね」といって、小さいお菓子が開発されて、それを「今度の東踊りでやろうよ。お茶出そうよ。お菓子出そうよ」とか。「お茶がおいしいね」というと、今度の銀座のこの行事で「お茶出そうよ」という、小さいことをつなげていくことが、普通になればいいなというふうに思っているのですけれども。

（大臣）一発勝負ではなくて何かにつながることはものすごく大事なのだと思いますね。

（阿川氏）継続が大事だと思ので。

（大臣）特に商売の場合は、それがつながっていくということは非常に大事ですが、それが一旦、被災地は切れちゃったものですから、そこであがき苦しんでいるのですよね。何かそういうつながりのかたちで復活することができればなと。我々もその思いは持っています。

（阿川氏）そうですね。

（大臣）家建てて、商店街つくって、あるいは病院つくって、そこまでは役所ができるのですよ。だけど商売は、役所は全然だめなのです。まさに民間の力が入ってこないと、あるいは地元の人たちのやる気といいますか。例えば、復興のステージは、これからますます民間の人の力が頼りになるというか、自立というのがキーワードになるんだろうと思います。。地元の人が「頑張るぞ」という気持ちになってこなければ、何をやったってだめなんです。自立というのはキーワードです。

（阿川氏）基本的にこちらが被災地を助けるという方向だったのですけれども、そうではない。「気仙沼とか被災地の人たちが、銀座の商売を助けてくれる、ということになることが必要なんだよ」というふうになったらいいなと思って、そういうビジネス展開をしたいなと思っているのですね。

（以　　上）